

淀川水系流域委員会 水位操作WG検討会（2006. 4. 17 開催）結果報告		2006. 4. 21 庶務発信
開催日時	2006年4月17日（月）13:30～15:40	
場 所	コラボしが2 1 3階 中会議室1	
参加者数	委員11名、河川管理者38名	
1. 主な検討内容		
①琵琶湖水位の移行操作（試行）と水陸移行帯WGにおける調査検討について		
河川管理者より、配付資料「琵琶湖水位の移行操作（試行）と水陸移行帯WGにおける調査検討について」、「近年の琵琶湖水位・雨量・放流量」、「平成18年4月出水概要」を用いて説明がなされた後、委員との意見交換がなされた。主な意見は以下の通り（例示）。		
○水位移行操作（試行）結果について		
<ul style="list-style-type: none"> ・水位移行操作（試行）によって、コイ科魚類の産卵数や産卵機会は増えているのか。 <ul style="list-style-type: none"> ←一定期間内に実際に現地で産卵された卵とふ化した仔魚をカウントしている他、水位変化と合わせて生存状況を調査している。現在も調査を行っているが、平成16年以前の調査データがないため、水位操作試行以前との比較はできない。平成16年、平成17年の調査結果から、どういう状況で産卵するかは分かってきたが、試行によってどう変わったかはわからない（河川管理者）。 ・水位移行操作（試行）はいつまで続ける予定なのか。 <ul style="list-style-type: none"> ←明確な目標年数は定めていないが、試行を続けていけば、ある程度の結果が集約されていくだろう。おそらく数年で結果が集約されると思っている（河川管理者）。 ・現在は、コイ科魚類の産卵を軸に水位移行操作（試行）の結果を評価しているが、何を軸に評価するかも問題だろう。放流量も軸になるし、利水も評価の軸になる（WGリーダー）。 <ul style="list-style-type: none"> ←委員会が作成した「琵琶湖水位操作についての意見書」も評価の軸だ。また、平成3年以前の平均水位が目標とすべき琵琶湖水位だという意見交換もしてきた。この水位も評価のポイントだ。 ・水位移行操作（試行）による淀川下流域への影響についても検討しなければならない。 <ul style="list-style-type: none"> ←何がどう影響するかまで含めて、現在検討をしている。既知の問題（水位低下の際に魚が逃げ遅れて砂州で斃死する）については配慮をしている（河川管理者）。 		
○水位移行操作（試行）結果の再検証について		
<ul style="list-style-type: none"> ・水位操作WGでは、現行の操作規則を超えた自由な議論をしていけばよいと考えているが、そのためにも水位移行操作（試行）のデータは重要だ。今回はコイ科魚類への影響が説明の中心だったが、河川管理者には、治水・利水面の反省点や改善点についての整理もお願いしたい（WGリーダー）。 ・降雨予測に応じた水位操作方法も検討していくべきではないか。 <ul style="list-style-type: none"> ←平成17年度は5/17に大きな出水があり琵琶湖水位が+0.3mを上回ったために急激に水位を下げなければならなくなった。4月初旬の段階で5月の降雨量は想定できないため、その時点での降雨予測をもとにした水位操作はかえって危険とも言える（河川管理者）。 ・河川管理者自身は、どういう水位操作がよいと考えているのか。過去の操作の結果を検証しているのか。やり方によってはもっとうまくできたかもしれない。 <ul style="list-style-type: none"> ←春先の試行操作については、見直しを行い、次年度の操作に活かしている。また、年間を通した操作結果については再検証はしていない。結果から見れば反省点はあるが、その時々判断は適切であったと考えている（河川管理者）。 ←やはり大切なのは、その時々判断基準だ。どういう基準で判断したのかが重要になってくる。どういう基準で判断すべきなのか、河川管理者だけではなく、委員会も考えていかないといけない。 		
○現行の水位操作規則について		
<ul style="list-style-type: none"> ・現行の操作規則の運用がはじまった平成4年段階での、6/15までの常時満水位+0.3mの考え方を聞きたい。常時満水位+0.3mにできるだけ近い水位で操作するのがよいという考え方だったのか。 <ul style="list-style-type: none"> ←そもそもそういう話は、なかったのではないかと思います。洗堰で流量を絞れば琵琶湖の水位が上がる。そ 		

の歯止めの目安が+0.3mという考え方だったのではないかと。これまでの操作記録を見る限り、必ずしも0.3mまで上がらなくてもよいという印象を受ける（河川管理者）。

- ・常時満水位+0.3mは、利水から見るとあまり意味がない。6/15以前は環境に有利な水位を設定してもよいのではないかと。

←100年前の琵琶湖では頻りに水害が起きており、その後、水位を徐々に下げた。歴史的経緯を考えれば、春先の常時満水位+0.3mは、個人的には、低くも高くもないと考えている（河川管理者）。

- ・「6/16にBSL-0.2m」が決定したプロセス、及び、淀川大堰と瀬田川洗堰の操作の関連性について、治水・利水面から説明して欲しい。これは琵琶湖での異常渇水対策にも関わってくる問題だ。

- ・湖岸堤もできたにもかかわらず、洪水期制限水位（-0.2m、-0.3m）がそのままなのは何故なのか。洪水期制限水位の根拠を説明して頂きたい。

- ・淀川大堰の放流操作を工夫することによって、「6/16にBSL-0.2m」へ向けた水位移行操作をより緩やかにできるのではないかと。淀川大堰の過剰放流によって琵琶湖の水位が下がりすぎているのではないかと。

←高浜地点で流量を観測するとともに、淀川大堰地点の取水量も把握している。直前24時間の取水量と供給量の差し引きをして、無駄がないように最低必要な要求量を出している（河川管理者）。

- ・昭和62年以降、フナ・ニゴロブナの漁獲量が大幅に減少している。原因を検討しなければならない。

←外来魚の密度が増えるとある段階で一気に在来魚が減るという可能性がある。湖岸堤も可能性の1つだが、あくまで推測だ。ほ場整備の進捗率と漁獲量は反比例の関係にあるが、90年以降は関連がなくなる。漁獲量減少の原因を特定するのは非常に難しい（WGリーダー）。

②次回の検討会について

- ・次回の検討会では、水位操作の問題点をより絞り込みたい。配付資料「琵琶湖水位操作に係わるこれまでの意見整理」への質問等があれば、庶務までお願いする（WGリーダー）。

以上

※結果報告は主な決定事項等の会議結果を迅速にお知らせするために庶務から発信させていただくものです。